

私の小学生時代、昆虫採集は「善」として扱われ、特に夏休みの宿題としては絶大な市民権を得ていた。しかし今は…。

数年前、息子の夏休みの宿題は絶対に昆虫採集だと、かなり勝手に決めつけていた。そしてもちろんのこと、山へ採集に連れて行き、標本作り、標本箱の作製まで熱血指導し、完成した誰が見ても立派な宿題を前に、「どうだ、すごいだろう」と父親らしきを見せられる唯一の場面とばかりにビールを片手に胸を張って見せた。

ところが学校から帰った息子が一言、「今日先生におこられた、生き物を殺す宿題はだめだって」。なる、何に！。どうしても納得のいかない私は、その環境白書の申し子のような先生と話すことにした。「とにかく、今は自然を大切にとか生き物を大切にという教育をしている時に、家庭で逆の指導をされては困るんです」と返す討ちに遭い、議論の余地すらなかった。「善」であった昆虫採集が「悪」となってしまった瞬間である。

サロシ

民報

あの先生、弁は立つが、何かが違うぞとら？ 服が汚れるから？ 算数と英語の標本という重要な遺産を後世に残す役割を果たすのである。

空けてしまった。ここまでは立派な言葉を並べて見たも今では毎日偉そうなことを言っている小学生時代の私の「昆虫採集」最大の目的は、かわいらしい昆虫たちを殺し、大人たちも、昔はみんな虫カゴをぶらさげ、網を片手に野山を駆け回ったはずだ。その死骸をビンで留めた標本を、いかにそしてアケビにかぶりつき、桑の実で口を紫色にして、ウルシにかぶれたはずだ。そこには「研究」という大義名分など

昆虫採集のススメ



渡辺 浩

へびに追いかけて友達を置いて逃げ存在するはずもないし、とにかく虫を採たヤツは卑怯者と言われたはずだ。そうって集めることが楽しかった。

やって自然を楽しんだはずだし、そうやって友達を増やしてきたはずだ。そして「昆虫採集」とは、自然の中で虫たちと遊びながら、自分の目で見て発見し、さまざまなきことを経験から学んだはずだ。驚いて、感動することなのである。

だ。なのはどうして、大人たちはこの最高に楽しい遊びを次の世代の子供たちに伝えるように、昆虫の命と引き換えようとしていないのだろうか。危ないかえにさまざまなきことを学び、知識を得る人間が他の生物を食することに比べて生を得ているように、昆虫の命と引き換

の、現実には悲しいもので、私の所属する「博多昆虫同好会」「福島虫の会」でも、会員構成はおじさん、おじいちゃんと呼ばれる年代がほとんどである。青少年と呼ばれる年代がないのである。将来の日本の虫たちの行く末を案ずる昆虫愛好家予備軍が育たないのである。

もう虫を追いかけて野山を駆け回る少年たちは絶滅してしまったということか。小さなディスプレイの中の擬似世界よりも、大自然はもっと大きいし、もっと奥が深く、もっともっと謎と不思議が待っているのに。

最近、学校では総合学習という枠の中で、子供たちが自然と向き合う機会を作ろうとしている所も増えてきた。大変に素晴らしいことである。そして、学校教育で社会で「昆虫採集」の市民権が再び復活することを心から期待している。

(石川町北町、会社員)